

the 15<sup>th</sup>

Regular

Concert

# 千工吹メンバー

Conductor 水島 敦 雄  
橋本 孝 夫 (3)  
Band leader 出 中 義 幸 (3)

吹奏楽部顧問 山 本 義 彦  
同 石 井 鏡 子

## [Piccolo & Flute]

高 梨 義 雄 (2)  
花 島 育 雄 (1)

## [Oboe]

文 田 哲 洙 (2)

## [Eb-Clarinet]

石 川 榮 (2)

## [Bb-Clarinet]

高 石 聰 一 (3)  
石 川 雅 彦 (2)  
武 井 晴 夫 (1)  
野 口 芳 宏 (1)  
日 暮 清 隆 (1)  
[Bass-Clarinet]  
川 口 泰 史 (1)

## [Alto-Saxophone]

大 塚 秀 夫 (3)  
菅 野 和 幸 (1)

## [Tener-Saxophone]

吉 野 勝 (2)

## [Trumpet]

石 出 昌 敏 (3)  
劔 持 千 秋 (2)  
日 野 原 正 己 (2)  
千 葉 正 一 (1)

## [Horn]

伊 藤 博 (3)  
橋 本 清 (3)  
平 野 公 平 (2)  
福 田 恒 夫 (2)

## [Trombone]

田 中 義 幸 (3)  
坂 田 稔 平 (2)  
永 田 浩 一 (2)

## [Euphonium]

柳 田 範 人 (2)

## [Bass & Tuba]

橋 本 孝 夫 (3)  
中 村 誠 (2)

## [String-Bass]

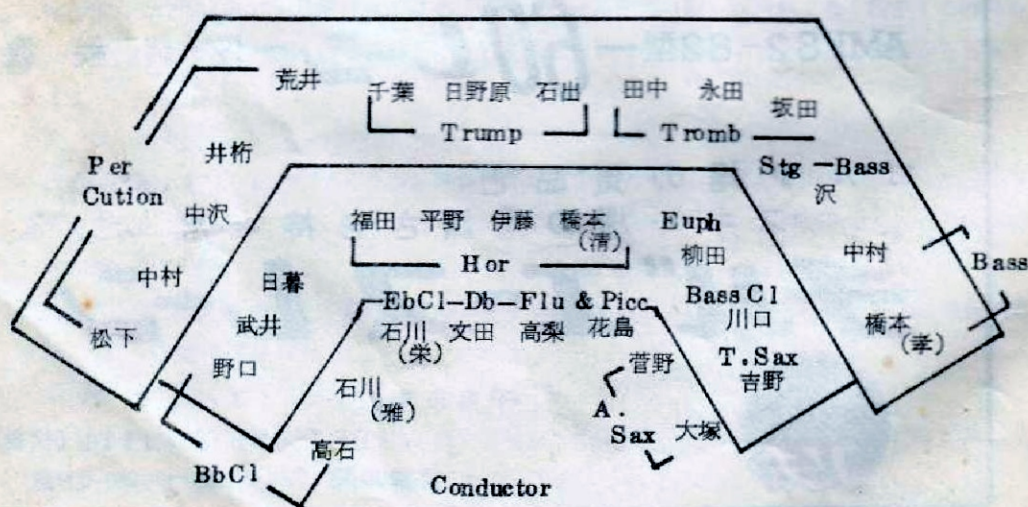
沢 和 男 (3)

## [Percution]

荒 井 弘 己 (2)  
井 桁 康 光 (2)  
中 沢 直 樹 (1)  
中 村 千 晴 (1)  
松 下 信 幸 (1)

(学年・五十音順)

司 会 村 串 晃



# 《 雑 感 》

伊 藤 博 Horn



入部して以来、クラブ一筋に精進して来た、また、これからも精進するであろう。僕は、あらゆる誘惑に勝ち、あらゆる欲求に勝ちつづけての今日、みんなは僕のことを鉄人と叫ぶ、まったく僕に、ふさわしい名であろう。この名にふさわしい、一つのエピソードを述べてみよう。

西暦19XX年△月○日のことである。僕は、授業が終わったらすぐさま部屋に行こうと思って、急いで部室への道を歩んでいた。そこへ、クラブでも為手のさぼりや、Yがさっと、僕の元へ、踊り出て「おい、ラーメン食に行かぬか？」僕はもちろん意気投合して「行こう」と言った。（しかし、僕が、そんなことをするはずがないことを、会場に、いるみなさんは、御存知だろう。この時、僕は、スバランイ鋭敏な頭脳で思考をめぐらしていたのである。このことは今にわかるだろう。）僕は、学校の坂を下り、ラーメン屋の前まで来た。店からいい臭いがただよって来た。その時だ、僕はYの耳を引っばって、冷静に言った「ラーメンの臭いだけで我満しろ、ここで臭いをかぐと、サッポロラーメンの臭いだって、ギョーザの臭いだってかぐことができる。」そう言って、僕はYの耳を引っばって、部室まで小走りに走って行ったのである。おお!!何んという鉄の意志だ。まったく我ながら愕伏するのである。

と、まあ話は終りだが、まだ、まだ、僕についての逸話は多くある。このことは部員、全員知っていることだろう。もしかしたら、会場のみなさんは、何か一つくらい、僕についてのニュースを、聞いたことがあるだろう。

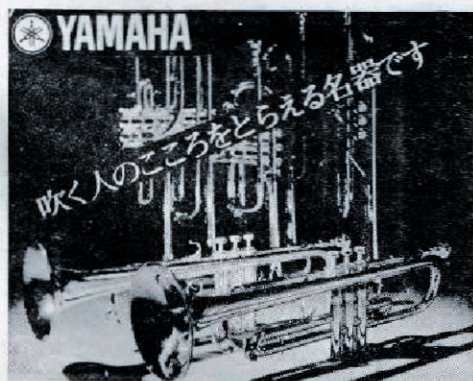
橋 本 孝 夫 Tuba



昭和28年7月5日、俺は母ちゃんのお腹の中から地球上に降りた。そこは世界的大都市「五井」という所だった。あの頃の空は青く澄んでいたのだが、俺が大きくなるにつれ町にはエントツが立ち並び空は灰色に染まってきた。そのせいか俺は町一番の天才（？）音楽家とまで言われるに致った。そして気がついたら名門工業吹奏楽部（と人は言うが俺には雑音発生部としか思えない）でTubaと言う黄銅製（緑青色＝サビもみられる）のモノを濃い緑（雑草）につつまれた冷蔵庫完備の部室で夏は蒸し暑く冬は凍りそうになりながらも吹きまくっていた。そのモノは俺がささやくと美しい音でひそかに答えてくれる。知らず知らずのうちに俺とモノは心が通じ合い恋人の仲にあいなったのである。（とは言うものの実は俺にはほんとうの「ナニ」がないのてがまんしているだけ）

ある日俺に「棒を振れ」との命令が出た。おかげで恋人に会える機会が少なくなってしまった。俺は棒を振っているうちに興奮し、おかげで折った棒が何と113本、たちまち会計に「金がつづかネーヨ」とドヤされ今日でもって追い出されるに致ったのだ。

最後に俺は叫ぶのだ。 VIVA千工吹!!



創業1743年（寛保3年）

幸せ包む  
楽しいお買物

京 奈良屋  
千葉・銀座TEL(27)2111



ある晴れた日に、岩根から電車に乗って蘇我に着いた。ここはスモッグ町、見上げるスモッグ焼けの空に、だれか吹くのかトロンボン、私の生実台、吹奏楽部に籍を置き先輩と1対1の個人教授、おふくろさんは早く帰って来いと言うけれど帰りたい帰れない、喜びも悲しみも幾年月、15、16、17と私の人生傷だらけ、クラブに熱中しすぎて、ある日突然さらば恋人、「ちょっと待って下さい、あの素晴らしい愛をもう一度」「やめて、愛してないなら、私より音楽が好きなんでしょう」と言って去ってゆくあの人の後姿が雨にけむる町角、ああ愛は傷つきやすく、あの人は行って行ってしまった、もうおしまいね。と言うわけで甘い生活は、みんな夢

の中、禁じられた恋とあきらめてまたクラブに熱中、17才も過ぎ去りいつの間にやら18才、ああ高校三年生、青春の光はどこへやら、影ばかりを味わったけど、いいじゃないの幸ならば、クラブに汗水流すこと、ああこれも青春と思えば気楽なものさ、卒業までもうわずか、クラブ仲間とも今日でお別れね、さようならさようなら元気でいてね、さようならをもう一度、また逢う日まで、それから先生にも三年間、お世話になりました、最後のお願い聞いてほしいの、卒業させてよ。

石 出 昌 敏 Trumpet



ヨは、生まれた時から、博士になる運命（ジャジャジャ、ジャアーン、ジャジャジャ、ジャアーン……）であったのだ。小学校中学校と、先生からはもちろんのこと〇〇大学の学長までもが、ヨのことを天才だとか、〇〇だとか言われていた。しかしである、2年9ヶ月と15日前のその日を思いだして見れば、なつかしくもあり、にくたらしくもある日である。千葉工業と言う名門の学校にもぐりこみ、ぼとしたのもつかの間であった。名門の中の名門吹奏楽部にこんどは、もぐりこまされた。部室は、冷暖房、電気、水道付きの部室であるが、今の部室の気候は、冷房をしてあり、水は雨にならないと、おとちてこないし、おまけにすきま風の自然換気である。（ヨク、マアー コンナヘヤデ サンネンカンモ カンパッタ モンダ オドロイタヨ……。）これならともかく、部員がヨをのぞいて、まともな者がいないのだから（ウソ イッテハコマルネ）こまったものである。

ヨたち同胞8人にとって最後の演奏会です。最後の最後まで聞いていってください。

沢 和 男 String Bass



管バスの頃のこと、演奏が終わりライトが消え、さあ帰ろうかなと思って足を踏み出しました。足がひな段のすき間にはいってしまった。ああしまった。ドドカーン『あれ？沢はどこだ』うちの猫は良くねずみを取ります。顔は天地真理に似ています。なぜこんな事を書くのかお分かりですか、余白をできるだけ少なくする為です。ある日みなれないのが当クラブにやって来た、ああやって来たやって来た。弦バス又の名を原付（これはしまったこれは私めの免許）弦付きと名のっているのです。弾くとおもしろいように音が出ます。しかしのりすぎますと指の皮を剥きます。むきますと箸など持てなくなります。某校の女子演奏者の指をみたいと思っています。私は今現在2皮剥けた3枚目を使用しています。現役で当クラブで大活躍するのは今日が最期しかしスタンドプレーしかもこの弦付き初の一般公開でも弾くとかや……弾くことであるよ。

「とかや」は、文末に添えて深い感動を表わす。付録いまはもう火曜日午前零時三十分すぎおやすみ。あーねないで聴いて。 DJ 林

高 石 聰 一 Bb Clarinet



俺が、お前と知合って、もう3年……。そうそう、初めて、お前と知合ったのは、3年前だったなあ。千葉工業に入学して、連れて行かれた、あのバラックの中だった。そして俺は、お前を見て、すぐに（あ……。チンドン屋の楽器だ、こんな持たされたらカッコ悪いなあ）と思ったのである。しかし、何と運の悪い事に、持たされた楽器が、お前。だが、持った姿が何と様になっているのである。そして息を吹き込んだ、何も出ない。いや、出るといえば、ピーという雑音だけなのである。俺は、お前が嫌いだった。そういう反抗するお前が、だが、反抗するお前に、俺は、バカみたいに、引きつけられていった。今の俺とお前の仲は、もう一日も離

